

《書評》

中村則弘著『台頭する私営企業主と変動する中国社会』

(ミネルヴァ書房, 2005年, A5版, 243頁, 4500円)

穂山 新

本書は中国における私営企業主という、市場経済化と経済成長の著しい現代の中国における重要なアクターの人間的な側面に着目し、そうした私営企業主の行動様式を、その背景にある歴史的、地域的な諸条件から解き明かそうとするものである。

著者の中村則弘氏(以下著者と表記)は中国社会研究を専門とし、特に中国の地域社会における経済活動に関する地道な調査研究を行ってきた。博士論文が基になっている前著『中国社会主義解体の人間的基礎』(国際書院, 1994年)は、黒龍江省の実地調査を通じて、人民公社の解体が貧困からの脱却や個人的利潤の追求によってよりも、民衆の連帯を基盤にしていたことを論じたものである。本書とほぼ同時に同著者による『脱オリエンタリズムと日本における内発的発展』(東京経済情報出版, 2005年)が刊行されているが、これも日本の地方都市における歴史的な条件や地域的な特性、民衆世界から企業家の人間像を描き出そうとする試みである。

こうした、豊富な実地調査に基づいて歴史、地域、民衆世界の視点から企業家という存在を理解しようとする研究姿勢は、本書でも貫かれている基本的なモチーフとなっている。鄧小平による1978年の「改革開放」以来、そして特に1992年の「南巡講話」以降の、中国における急激な経済成長と都市化に関しては、汗牛充棟なほどの本や文章が溢れている。しかし、そこで具体的に活動しているのは具体的にどのような人々であるのかについては、意外にも(特に地方の企業家については)多く語られてこなかったと言ってよく、ジャーナリズム的には「拝金主義」の一言で済まされしまう場合も依然として少なくない。日本と中国との関係の深まりが単に政治経済のレベルだけではなく、具体的な個人間関係のレベルにまで浸透しつつある現在、企業主個々に焦点を当てた本書はまさに時宜を得た研究であると言えるだろう。

本書は全部で序章を含めた八つの章で構成されている。

序

- 第1章 変動の担い手としての私営企業主
- 第2章 歴史にみる商人層と支配層
- 第3章 私営企業の発展と調査地概況
- 第4章 私営企業主の類型とその形成過程
- 第5章 中間組織と国家行政

第6章 生活指針と民衆世界にみる地域性

第7章 変革アクターとしての意義と展望

本書で論じていることは多岐にわたっているが、その基本的な視座をここでは敢えて二つに要約しておきたい。

第一には、脱オリエンタリズムという立場から世界システム論のような大きな分析枠組よりも、民衆の生活世界、地域の自然的・歴史的な条件、企業家個人の人的個性などに照準を合わせていることである。つまり、「西欧近代の価値を基準にした条件を示し、それが欠如している内容を見出すことで、対象となっている社会を一刀両断すること」は、「現地で生きている人々自身の喜びと悲しみ、奮闘と憩いなどの姿はどこかに置き忘れられてしまっている」(3頁)と考えるのである。

こうした立場は著者が、本書以外の著作でも私営企業主という題材を扱うと必然的に登場するであろう、いわゆる市民社会論にあまり言及していないことから理解できる。もちろん、市民社会をあくまで分析概念として使用する意義は著者も否定しないだろうし、今の市民社会論は西欧中心主義的な視座を批判するものも多いが、結局のところ中国の状況を「市民社会の萌芽段階」とか「国家主導的な市民社会」という結論を必然的に下さなければならないことは確かである。それがオリエンタリズムへの批判意識を持っているとしても、やはり著者にとっては「西欧近代的な価値基準による一刀両断」の域を出ないのである。そういう営みよりも、著者はむしろ「人々の多様な生活や生き様から、両義的・重層的な歴史的現実を掘り起こすこと」(3頁)の積極的な意義を見出しているのである。つまり、特に地域性に根差した価値の多様性は維持してきた中国と東アジアにおいては、民衆世界を復権させることが比較的容易であり、「個々の人間において、豊かな個性、多様な生き方を承認する基盤をもたらすものとなろう」(204頁)と言うのである。

それゆえに著者は、この種の地域研究ではあまり言及されないような歴史文化的な背景を、私営企業主の人的な特性を理解するための指標として重視している。本書の第2章では伝統中国における商人の歴史的な位置づけが説明されており、儒教的な建前とは裏腹に商人の活動には寛容で、王朝体制とも積極的に関わりがあったことが論述されている。また第3章では、調査対象地域である温州、戸県、宜春、蘇州の四つの地域概況が説明されているが、地理や人口、産業構造などの概況を記述するにとどまらず、その地域における近代以前からの商人の歴史的な特質から、文化的、宗教的な背景までに言及している。

第二には、私営企業主に対するアンケートやインタビュー調査などの結果を踏まえて類型化し、それを上述の地域的、歴史的な特性と対応させていることである。例えば第4章では、国家に対する態度が「対抗／迎合」、生活での志向が「営利追求／精神充足」で軸をとって、経営と開発の精神的充実を求めて行政に対する反抗をも辞さない「反骨型」、一心不乱に金儲けの道を進む「不屈型」、状況依存的な「随従型」、内面的、文化的なものを生活の根幹としている「賢明型」の四つに分類している。さらに第5章では、活動のあり方が「積極／消極」か、国家行政への対応が「癒着／自律」かという軸で、国家行政幹部に利害を取りはからしてもらう「抱き込み型」、国家行政に追従する「ぶら下がり型」実利の面から国家行政の関与も冷めた目で認める「距離おき型」、行政に率直に異議申し立てをする「異議提起型」に分類している。

著者によれば、経済水準が高い蘇州（距離置き型）と温州（抱き込み型）が全く逆のベクトルを向いているように、こうした類型が経済的な発展段階などとは有意連関せず、むしろ当該地域の歴史的、文化的な背景と有意連関するものであるという。例えば第6章で、「随従」「ぶら下がり」型の宜春では祖先崇拜と民間信仰の伝統が強く、「反骨」「意義提起」型の戸県は民間信仰を抑制して儒教による民衆世界の再構成を行おうとした文化的伝統が背景にあると説明されている。つまり、戸県の企業主は開放的で陽気で共感性が高いが、これは民間信仰を抑制して儒教による民衆世界の再構成を行おうとした文化的伝統と対応し、「不屈」「抱き込み」型の温州の企業主は社会と結びつくなど陰湿で孤独で閉鎖的であるが、これは功利的欲求を積極的に容認して民間信仰も現世的利害の側面から肯定してきた文化的伝統に対応しているのだという。

そして著者はこの反骨型の私営企業主に、将来の中国における積極的な意義を見出している。すなわち、旧来の社会主義的な理念や基盤がなし崩し的に崩壊（腐食の変動）し、都市や農村においては底辺階級が形成されて社会的な不安や不満が増大し、私営企業主が支配階級と同盟関係を形成して農民や労働者を切り捨てつつある現状では、新たな構想や運動が出現する可能性は、政治体制や社会制度の変革を求める志向性が強い反骨型にこそ見出すことが出来ると主張するのである。

現在、中国社会が驚異的な変化を見せており、急速な経済成長を達成する一方で、環境汚染や貧富の格差、そして共産主義イデオロギーの衰退によるモラルハザードといった問題が噴出し、各地で民衆暴動が頻発していることは周知であろう。本書に底流するのは、こうした現代中国の変動のあり方が地域民衆の生活を省みないことに対する強い批判意識や危機感であると同時に、そうした状況の中から積極的な展望をなんとか見出せないだろうかという姿勢である。

その意味で、著者が立てた私営企業主の類型は、単なる理解の見取り図なのではない。それは、現代中国における変化の方向性を把握するとともに、その中にある積極的な要素をなんとかして引き出そうとする動機に支えられている。地域の歴史文化的背景から私営企業主の特性を理解するという分析方法も、おそらく著者の趣味志向という面もあると思われるが、大文字の「中国」のレベルの経済活動や思想文化だけに焦点を当て、それを一色で塗りつぶしてしまうような「中国研究」に対するアンチテーゼという側面があると理解することができるだろう。

本書における、歴史文化的背景と私営企業主の人的特性との連関性や、反骨型に対する積極的な評価の根拠などは、正直なところ論証としてはもっと詰めるべき部分がある（特にサンプル数が少ない）ように感じたが、こうした議論を展開するための問題意識と方向性は骨太で明快である。例えば、民間信仰も思想・理念的な伝統も希薄な「賢明型」企業主の増加に対して、著者はある意味で露骨な利潤追求を行う「不屈型」以上に批判的な眼差しを向けているが、このタイプの企業主は現在起こっている「腐食の変動」の問題をシニカルに許容するものであるからである。だから、思想・理念を民衆レベルで共有している伝統があるからこそ現状に対する積極的な批判意識を持つことができる「反骨型」に、中国が将来進むべきモデルを見出しているのである。

こうした議論と論理の組み立て方は、確かに「蛮勇」に近いところがないとは言えない。

しかしあくまで個人的な印象で言うと、近年は現場調査型の論文は非常に増えているものの、「現場」を支えている歴史文化的背景があまり重視されず、また素朴な怒りや積極的な展望についても慎重を期して語らない傾向があるように思われる。だから論文としてはまとまっただけでも、関心の薄い他者にとって重要かどうかがよくわからないような、現場の細かな問題に拘泥している印象は否めなくなる。そもそも社会学は単に調査を手際よくまとめればそれでよしというのではなく、調査結果についての歴史のおよび社会的な因果連関を明らかにして、現実の問題解決に対する示唆を与えるための学問である（またなければならぬ）と考える。本書の良さは、この点に関しては非常に骨太で明快なことにあり、またなにより著者が中国の地域社会で生きる人々と肌で接してきた記述の厚みを感じさせるので、一見飛躍した議論にも暗黙の説得力を与えていると言えるだろう。

本書に対して評者から何らかの意見があるとすれば、問題設定と結論が、著者の根源的な問題関心でもある脱オリエンタリズム的な視座によってまとめられている点にある。もちろん脱オリエンタリズムという問題意識そのものは共感できるものであり、P.A.コーエンや余英時のような「オキシデンタリズム」的な議論に対する違和感についても全く同感である。しかし正直なところ、脱オリエンタリズムは具体的な問題を解決する視座と言うよりは、あくまで研究者が最低限身につけるべき学問上の倫理的態度であると考えている。だから、解決すべき問題の方向性を脱オリエンタリズムと民衆世界という点だけに集約するだけではなく、特定の具体的な問題を解決するような文脈を挿入したほうが、脱オリエンタリズムという視座に対する説得力がより増すのではないだろうか。例えば（安易なテーマと思われるかもしれないが）中国社会における問題として「非民主的」「貧富の格差」といったテーマがよく取り上げられるが、こうした問題設定の妥当性を中国の私営企業主を分析することで再検討していくという課題を立てることが可能である。

事実評者は、経済先進地の温州と蘇州が、国家と積極的に癒着したりシニカルに国家の干渉を許容したりしているという分析を非常に興味深く読んだが、それは（いわゆる「市民社会」論の前提とは異なって）経済成長それ自体が「民主化」を招くわけではないことの一つの例証になっていたからである。そしてそこでは、依然として一部にはびこるステレオタイプ的な「独裁国家」の姿とも違い、自分達の利益になるかどうかで自在に国家と癒着したり離れたりする、ある意味で国家を手玉に取っているとも言える、私営企業主たちが逞しく生きるダイナミックな姿が描かれている。「反骨型」に対する著者の高い評価は、本書を読む限りではあくまで心情的な共感に近い感じがするが、こうした政治的な民主化の文脈に積極的に乗せ、市民権と選挙制度を所与の前提とする民主主義ではない新たなタイプの民主主義の可能性を探り出すことができるならば、より実践的でアクティブな議論になるものと考えられる。

そして、本書では特に窺うことはできなかったが、「貧富の格差」が深刻な問題になっているのか——また問題なのは確かだとして、どのようなメカニズムで生じしているのか——どうかという点について、「富」を代表している存在であろう私営企業主の存在が、何らかの形で社会的なストレスやルサンチマンを本当に生み出しているかどうかを検討することもできる。特におそらく著者も強い関心をもっているように、中国では儒教から毛沢東主義に至るまで、「私」を否定的に理解して「天下公」と「均分」を尊ぶ思想的伝統があり、

現下の経済成長も単純に「自由な個人の競争」などという側面だけでは語れないことは容易に想像可能だろう。もし、私営企業主が貧富の拡大にも関わらず地域住民に信頼されているとしたら、その理由を解明することは、私営企業主というそれ自体は「西洋近代」的な枠組で理解されがちな存在が、逆説的に中国の民衆社会における伝統的な秩序のある意味で代表しており、そうした伝統的秩序の中でこそ成功していることを説明することになるだろう。この点で、本書ではあまり説明されていなかったのだが、私営企業主が地域社会においていかなる社会的な地位にあるのか——地域社会の指導的な立場にあるのか、それとも地域社会の自治には無関心・無関係なのか——あるいは私営企業主の業種が何で、その業種が地域にどのような貢献しているのか、などということもおそらく重要になるはずである。

現在、ある意味でオリエンタリズム批判は常識化しており、かつてのように無条件で人々に刺激的な議論を提供することは難しくなっている。そのためオリエンタリズムへの批判意識そのものが停滞している感があるのは否めない。皮肉な話だが、サイドが西洋／東洋の二分法的な認識論をイデオロギー的に批判した結果、そうした二分法の歴史的価値と興味関心そのものを削ぎ落としていった面があるのは確かである。その意味で、従来のような道徳審判的な方法ではなく、地域民衆の世界の中で生きる人々の姿を具体的に描くことによって、オリエンタリズム批判を新たに救い出そうとする本書のような試みは貴重であると言えるだろう。その上で、具体的にどのような問題を明らかにし、解決するのかの文脈で脱オリエンタリズムを語ることが、オリエンタリズムへの批判意識の再生のために必要になってくるであろうと考える。

最後になったが、本書の良さはなんと言っても、中国の民衆世界に対する著者の率直なまでの熱い思い入れにある。かつての中国研究者（特に竹内好など）は、中国への思い入れを日本の現状を批判するための鏡として語っていたようなところがあったが、本書における著者の思い入れの良さは、あくまで中国の民衆世界それ自体に対するものである点にある。あるいは読者の中には、著者の中国へのあまりの思い入れの強さについていけないと言う人もいるかもしれない。しかし、「反中国」的な気分が日本に蔓延しつつある現在、政府高官の言動や「反日」デモなどから中国を「危険」「非常識」扱いして現実から目を背けようとする前に、本書で描かれているような中国民衆が生きるダイナミックな世界の現実を一度直視してみることが必要であろうと考える。

(あきやま あらた／筑波大学大学院)